様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２８９１

研究課題名（和文）3～4世紀中国長江・湘江流域における地域社会・地方統治の研究

研究課題名（英文）the Study of Local Administration and Society in Chang-Jiang river and Xiang-jiang river basin from the 3rd to the 4th century in China

研究代表者
安部　聡一郎（ABE, Soichiro）

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：１０３４５６４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1996年に中国湖南省長沙市で発見された三国時代（3世紀）・呉国の出土簡牘である走馬楼呉簡を主な材料として、当該時代の長江・湘江流域の地方政治・社会の動静を明らかにすることを目的に、末端の居住・耕作・徴税の単位である丘と、その上位に位置する郷の関係の包括的整理を行い、郷と丘の関係は地形、人的移動など複数要因から把握すべきものであり、その複雑な様相は後漢時代以来の社会変動等の影響で混乱した姿であるとみられることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research is based on the Zoumalou wooden and bamboo slips discovered in Changsha, Hunan Province, China in 1996 as a main historical material, and is aimed at understanding the conditions of local politics and society in the ChangJiang River and XiangJiang River basin during the Three Kingdoms period.
And based on its results, relationship between Xiang and Qiu should be grasped from plural factors such as its topography and human movement, and its complicated appearance seems to occur as the result of the influence of social change etc. since the latter Han period.

研究分野：中国・漢魏晋史

キーワード：出土資料　走馬楼呉簡　長沙

１．研究開始当初の背景

1996 年、中国湖南省長沙市で発見された長沙走馬楼三国呉簡（以下「走馬楼呉簡」と略称）は、初の本格的な後漢末・魏晋時代（A.D.3c-4c）の出土竹簡・ 木簡（以下、簡牘と総称）であり、当該時代の地方行政・社会の実態を明らかにする史料として、続いて近傍より出土した東牌楼後漢簡牘等と共に注目されている。

申請者は本史料について、以下（ア）（イ）の両面から研究してきた。（ア）「長沙呉簡研究会」を科研研究班による実見調査・研究発表の成果に基づき、当時の名籍・帳簿の形式と作成手順を明らかにした。（イ）国立歴史民俗博物館の共同研究による走馬楼呉簡の実見調査成果を基礎に、日本木簡・韓国百済新羅関連出土資料と中国簡牘の比較実見調査を進め、木簡作成技法面における朝鮮半島と中国西北辺境の関連性の一端を明らかにした。

出土資料は一次史料として高い価値を持つ一方、それ自身はある時点の限られた内容の史料に過ぎないという制約を持つ。走馬楼呉簡を中心とする後漢末・魏晋時代簡牘（A.D.2c-3c、以下魏晋期簡牘と総称）の研究も、形態観察に基づく作成・使用方法の分析、簡牘出土状況や周辺地理環境との考量によって当時の政治・社会の中に簡牘を位置づけることを通し、文献による歴史研究と比較可能な通時性・共時性を得ることでこの制約を乗り越え、文献に基づく従来の歴史理解、さらには東アジア書記文化の理解の深化に資することが不可欠である。

申請者はこの観点から、上述（イ）で得た知見を活かし形態的特徴の詳細な分析と出土状況を考え併せることで（ア）の成果を発展させ、「戸品出錢」簡と称される賦税徴収関係簡牘を題材に、その作成から帳簿編集に至る行政手続きと県―郷行政の特徴を明らかにする成果を得、この視点が走馬楼呉簡研究の推進に有効であることを確かめた。

２．研究の目的

本研究の目的は、走馬楼呉簡を中心とする魏晋期簡牘の実見調査と総合的分析、および地方志史料・考古発掘成果に基づく地理環境の復元に基づき、後漢後半から三国・西晋期の長江・湘江流域の地方政治・社会の動静を明らかにする点にある。この視角から、走馬楼呉簡にみえる租税・賦税の徴収と郷・穀倉の位置関係を明らかにすることで、魏晋期簡牘を用いた研究を、厚い蓄積を持つ文献史料に基づく後漢・魏晋時代地方政治・社会の研究の中に位置づける方法を示し、秦漢魏晋南北朝時代の政治・社会の研究の発展に貢献する。

３．研究の方法

本研究は、（１）まず従来の上述（ア）（イ）両観点での成果を発展させ、走馬楼呉簡の形態観察と簡牘出土状況の検討を基礎に、特に関係県官吏の動向に注目して、県―郷間の行政手続きと県内の郷の相対的配置状況の解明を進める。次に（２）周辺の地理的環境に検討の対象を広げ、上で解明した県―郷間の行政手続きと県内の郷の配置状況を、当時の長沙周辺の具体的な周辺地理環境の中に位置づける。これによって、例えば武陵蛮と三国呉・蜀政権の関係など、従来文献史料に依拠して解明されてきた当時の長江・湘江流域の地方行政・地方社会の動静を魏晋期簡牘から理解できるようにし、文献を主たる材料に積み上げられてきた魏晋南北朝史研究と簡牘研究の比較総合を可能とする基盤を形成する。

（１）段階では、まず典田吏・勧農掾など関係官庁各部門・官吏の動向と職務、およびそこに示される県―郷間の行政手続きの特徴の解明、次いで郷の下位にある居住・耕作・徴税の単位＝丘を手掛かりに、郷と丘の相対的配置状況と穀倉との関係を明らかにする。（２）段階では、関連する地方志や発掘報告等を集成・整理し、魏晋南北朝期の長沙周辺の環境およびその県城・穀倉・交通路などの位置関係を地図化する。その上で、（１）で明らかにした県―郷間の行政手続きや郷・丘の配置状況、官庁各部門・官吏の動きをこの地理的位置関係の中で把握し、穀倉および郷・丘の位置比定を行う。以上のプロセスを経ることで、簡牘そのものの検討から得られる（１）の研究成果を、長沙およびその外部との具体的連関性の中で理解できるようにする。これによって、当該史料を魏晋期の政治・社会の中に位置づけ、文献による歴史研究と比較可能な通時性・共時性をもつものへと引き上げる。

４．研究成果

まず（１）段階については、下記 5.雑誌論文(2)、および学会発表(2)とこれに基づく図書(1)の論文の成果を得た。

雑誌論文(2)は、上記 1.で述べた（ア）（イ）の両観点からこれまで追究してきた走馬楼呉簡中の「戸品出錢」簡を引き続き題材とし、実見等で得た知見を踏まえて既刊日本語論文を改訂し中国語にしたものである。「戸品出錢」簡は、県・侯国内に置かれた郷を単位として上品・中品・下品に分類された戸から一定の基準で錢を徴収した記録であり、徴収から県における帳簿作成に至るプロセスの全体を把握できる点で貴重な史料といえる。各簡には徴収の単位となった郷だけでなく、関与した郷典田掾なる官吏の名がみえる。この郷に注目して「戸品出錢」簡を見ると、出現する都郷・模郷・中郷の三郷のうち、都郷・中郷が書式および担当官吏が同一であり強い関連性を窺わせる一方、模郷は書式・担当官吏とも異なり、帳簿作成に至るプロセス自体が都郷・中郷と異なるという顕著な差異を見せている。さらに郷担当官吏の職名・担当

者・任期等の視点で「戸品出銭」簡以外の呉簡も含めて整理を行うと、官吏の兼任や賦税納入などの処理上で都郷・中郷以外にも特定の二郷が一組で扱われる例が確認できる。

この郷相互の関係は、それが実際の行政処理に関わっている以上、その位置関係に依拠している可能性が考えられる。この観点から研究を行った成果が学会発表(2)と図書(1)の論文である。

走馬楼呉簡中には、当時の臨湘侯国内に置かれていたとみられる郷が複数史料を有するものだけで 12 確認できる。これら郷のもとには、走馬楼呉簡で初めてその存在が知られるようになった居住・耕作・徴税の単位＝丘が多数存在する。この丘には複数の郷に所属するものが相当数含まれることが知られており、その複数郷の組み合わせから郷相互の相対位置関係を明らかにする試みが従来行われてきた。この試みが前提とするのは、丘を湖南・湖北地域に現在も見られる細い谷状の地形の呼称「冲」に類するものと見なし、地理的に実体を持つ丘が複数郷をまたぐとするモデルである。一方でこのような観点に対しては、丘と郷の関係の複雑さをそれでは充分整理しきれないとする批判も既に現れていた。

丘・郷の関係についての史料となるのは賦税納入に関する小型竹簡が主であるが、先行研究はこの賦税納入竹簡の公開開始初期に行われており、それ以後に公開された 3 万点を超える竹簡資料を利用できていない。従って本研究では、まず近年新公開の竹簡資料を網羅的に整理した上、そこに確認できる複数郷に属する丘の数から郷相互の関係の復元を試みた。この整理で確認できた丘は 544、うち 16%に相当する 87 個が複数郷と関係しており、その関係を郷ごとに分けて示したものが下記表 1 である。

都	中	東	西	南	北	桑	樂	平	模	廣成	小武陵	
	3	4	2	2	0	2	0	4	1	4	3	都
3		5	12	0	0	1	1	2	2	2	0	中
4	5		7	2	1	7	3	8	4	7	8	東
2	12	7		1	0	5	2	4	2	2	0	西
2	0	2	1		0	0	1	2	0	4	3	南
0	0	1	0	0		0	0	1	0	0	0	北
2	1	7	5	0	0		4	10	2	5	3	桑
0	1	3	2	1	0	4		3	1	3	5	樂
4	2	8	4	2	1	10	3		4	10	4	平
1	2	4	2	0	0	2	1	4		0	3	模
4	2	7	2	4	0	5	3	10	0		4	廣成
3	0	8	0	3	0	3	5	4	3	4		小武陵

表 1　複数郷にまたがる丘の数

表 1 から窺われるように、西郷と中郷、平郷と桑郷、広成郷と平郷など、双方に属する記録を持つ丘が際だって多い郷の組み合わせは確かに存在するものの、それ以外にも複数個の史料を持つ組み合わせが広範に存在する。さらに 2 郷だけでなく、4 郷にまたがる丘 9、6 郷にまたがる丘 2 も確認でき、かつこれらは史料実見結果および竹簡写真版による検討を踏まえても、いずれも釈字の誤りではないことが明らかな例を含んでいる。この状況からは、丘を地理的実体を持つ単位としてこれをもとに郷の相対的な位置関係を考えることは極めて困難であると言わざるを得ない。このような状況を如何に理解すべきかについては、雑誌論文(1)において、五一広場簡・東牌楼東漢簡牘など走馬楼呉簡に先行する長沙出土簡牘を利用しつつ後漢時代前半期(2 世紀初頭)からの丘の展開を概観し、当初走馬楼呉簡段階の特色とみえた郷・里と丘の組み合わせによる人と田土の把握システムが、実際には後漢時代以来の政治・社会情勢の変化の中で混乱し限界に達しつつあった姿と考えられることを指摘した。

ついで（２）段階については、本研究課題を基課題として採択された国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）(15KK0045)としての成果による部分が大きい。左記課題により 2016 年 10 月より半年間長沙市に滞在し、その間に長沙簡牘博物館での走馬楼呉簡実見調査、同博物館および市考古所・省文物考古研究所関係者からの聞き取りと史料収集を実施した。その結果、『水経注』等から復元できる漢魏晋南北朝期の臨湘県周辺の地理状況と対照すべき従来の考古発掘成果、ならびにこれに基づく歴史地理の研究成果は、21 世紀、ことに近十年の新たな考古発掘成果によって全面的に見直しを迫られていることが明らかになった。その見直し成果の一端は黄朴華主編『長沙古城址考古発現与研究』（岳麓書社、2016 年）でわずかに示されているが、全貌の公開は今後をまたなければならない。従って県城・穀倉・交通路等について当初想定していた形での位置比定は今後の研究課題とせざるを得なくなったが、しかし現状で可能な位置比定の試みとして、大木簡（嘉禾四年嘉禾吏民田家莂および嘉禾五年吏民田家莂）中の各田土の町数・畝数から窺える丘ごとの地勢と長沙周辺の地勢状況を比較対照し、これを（１）の研究成果と関連づけることによって、郷の位置、ならびに各丘の性格の推定を行った。この成果が学会発表(1)である。

各大木簡には、各人がもつ田土の畝数（面積）と町数（田土区画数）が記されているが、ここから１町あたりの畝数を計算することで実際に存在する田土のありようを推測し得ることが従来から指摘されている。本発表ではこの指摘に基づき、まず各丘ごとの１町あたり畝数の分布状況をグラフ化し、これを図書(1)に示した郷―丘関係のデータと照合し、郷との関係状況を踏まえつつ傾向分析を行った。その結果、丘ごとだけでなく郷ごとにも一定の傾向の差が現れており、一部の郷で嘉禾四年から嘉禾五年に１町あたり畝数が半減する現象が起きているにも拘わらず分布傾向そのものには四年と五年で違いが現れないことからみても、（１）の検討結果にもかかわらず丘と地理的環境の関係は否定しがたいことがまず確認された。長沙故城の

南・東方向は丘陵地帯だが、北方向は多く低湿地帯が広がるという地勢の違いを念頭におけば、こうした分布傾向はこの地勢の違いと対応している蓋然性が高い。ついで中郷と関連する丘の他郷との関係状況の整理から、複数郷にまたがる丘は人間の移動などに伴う処理として行われた結果としてばかりでなく、実際に隣接郷にまたがっていたとみられる丘も存在しており、それは史料点数の多寡とも対応していることを明らかにした。

以上（１）（２）両段階の成果より、郷―丘の関係は従来考えられていた以上に極めて錯綜しており、「冲」を参考に理解する方法で一面的に理解できるものではないこと、しかしながら丘は地理的環境と無関係ではなく、推察される郷・丘の地勢は長沙周辺の地勢と一定の対応関係があり、そこから位置関係を把握し得る可能性があること、そしてこうした複雑な様相は後漢時代以来の社会変動等の影響を受けて生じた混乱した姿であるとみられることを明らかにした。学会発表(2)で示唆したとおり、ここには田土の把握の問題と人の把握の問題の両面が関わっている可能性がある。本研究が当初目標とした郷・丘および穀倉・交通路等の具体的位置の把握は、その基礎とすべき考古発掘成果が大幅な見直しを迫られているという予想外の状況があったため具体化には至らなかったが、特に丘と人的把握の問題という点では、近日中に公刊予定の長沙周辺の漢墓に関する包括的な成果が注目される。次の段階においては、この人的分布・人的把握の方面から、長沙周辺の漢墓に注目し、引き続き長沙の地理的環境のなかで走馬楼呉簡を把握し、後漢後半から三国・西晋期の長江・湘江流域の地方政治・社会の動静を明らかにしていく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

(1) 安部聡一郎、「走馬楼呉簡からみる三国呉の郷村把握システム」、『アジア遊学』213 号(魏晋南北朝史のいま)、査読無(依頼原稿)、2017 年、pp.247-256。

(2) 安部聡一郎（劉峰訳)、「典田掾、勸農掾的職掌與鄉――對長沙吳簡中所見“戶品出錢"簡的分析」、『簡帛研究』、査読有、二〇一五秋冬巻、2015 年、pp.238-256。

〔学会発表〕（計 2 件）

(1) 安部聡一郎、「長沙走馬楼三國吳簡嘉禾吏民田家莂中所見的“丘”再考察――以畝數／町數數據為線索」、中国魏晋南北朝史学会第十二届年会暨国際学術研討会、中国・河北省邯鄲市・溢泉湖度假村嵩景楼酒店、2017 年 8 月 17 日。

(2) 安部聡一郎、「長沙走馬楼三國吳簡中所見“鄉”與“丘”對應關係的再研究」、纪念走马楼三国吴简发现二十周年长沙简帛研究国际学术研讨会、中国・湖南省長沙市・湖南省招待所、2016 年 8 月 28 日。

〔図書〕（計 1 件）

(1) 長沙簡牘博物館編、中西書局、『長沙簡帛研究國際學術研討會論文集』、2017 年、pp.1-555。安部聡一郎、「長沙走馬樓三國吳簡中所見“鄉”與“丘”對應關係的再研究」、pp.119-132。

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕

(1) 安部聡一郎、「書評と紹介：角谷常子編『東アジア木簡学のために』」、『日本歴史』第 820 号(2016 年 9 月号)、2016 年、pp.86-88。

６．研究組織
(1)研究代表者

安部　聡一郎（ABE, Soichiro）
金沢大学・歴史言語文化学系・准教授
研究者番号：10345647